

会津の歴史シリーズ



第7回 会津の歴史⑥ (松平容保)

中岡 進 (なかおかすすむ)

若松城天守閣郷土博物館
副館長・学芸員



一般の方は、会津の歴史というと、最も関心が高いのは幕末から戊辰戦争にかけての時期と思われる。そこで、これまでのように領主ごとの歴史の紹介ではなく、19世紀半ばの十数年という極めて短い期間ながら、これを2回に分けて紹介しようと思う。ただ、本誌の読者はほとんどが福島県に関係する方だろうから、戊辰戦争に関しての一般的な知識はお持ちだと思われるので、歴史の教科書にはあまり取り上げられない会津側の視点からの幕末史として書かせていただく。あえて「教科書に載らない」とお断りしたのは、現在の歴史の教育が基本的には明治政府によって定められた方針を踏襲しているため、まさに「勝てば官軍」というわけである。しかしそのことをとやかく言うつもりはない。以下に書くのは少なくとも福島県に関係する人ならば知っていてほしいということがらである。

2回に分けたうち、今回は藩主である松平容保を紹介する。幕末の会津における最重要人物である。もしかしたら、会津藩の戊辰戦争の名称としては白虎隊の方が知られているかもしれない。し

かし、白虎隊が有名になったのは、戊辰戦争からずいぶん経ってから。しかもそこには、会津藩の敵だった近代日本を築いた側の思惑が絡んでいたと思われるのである。そのことについては次回に譲ることにしよう。

◆容保、会津へ

会津松平家8代藩主の容敬かたかは、幕政の中枢である溜間詰たまりのまつめとして職務をこなし、後の大老井伊直弼いなおすけから尊敬されるなど人望が厚かった。しかし跡取りとしての男児に恵まれず、美濃国高須藩主松平義建まつだいらよしたつの子の銚之允けいのすけ（のちの容保）を養子に迎え、娘の敏姫としひめと結婚させた。高須藩とは美濃国（現在の岐阜県）の南端に位置する3万石の小藩であるが、御三家の尾張徳川家に世継ぎがない時にはこれを補う支藩として、重要な役割を担ってきた。容保の兄弟では、兄の慶勝よしかつが尾張藩、茂栄もちほるが一橋家、弟の定敬さだあきが桑名藩を継いで、戊辰戦争では敵味方に分かれて戦うなどした「高須四兄弟たかすよんきょうだい」として知られている。

容保は会津入りすると、高遠以来の重臣である



松平容保 肖像写真（会津若松市所蔵）

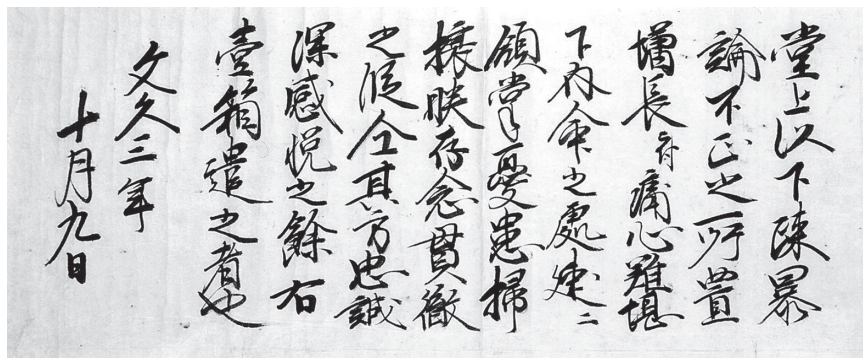
の大獄）へと動くが、反発した水戸藩士らに暗殺され（1860年桜田門外の変）事態は混迷する。ここで容保は溜間詰の一人として、（御三家の一つである）水戸藩といえども罪は罪として罰し、速やかな事態収束を図った。このことで容保が政治的に注目を集めることとなり、新しく設けられる京都守護職への就任を要請された（1862年）。容保は固辞するが、越前の松平春嶽は藩祖保科正之が定めた会津藩家訓第一条にうたっている「將軍家への絶対服従」に反するものだとし、最終的に容保は受諾した。家老西郷頼母は猛反対するも職を解かれ、12月に約1,000人の藩士らを率いて京都入りした。

◆京都守護職として活躍

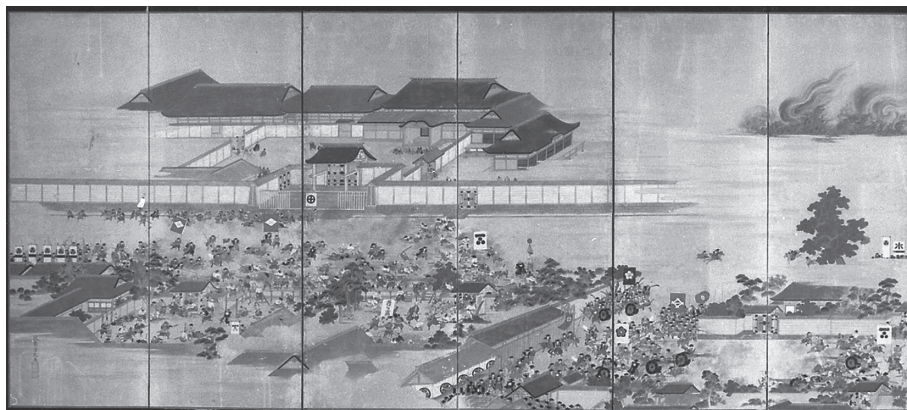
当時の京都は、幕府へ不満を持つ長州藩を中心とした志士たちが、朝廷の力を借りて幕府へ対抗しようとする動きが活発になっていた。当時の孝明天皇は、外国人嫌い（攘夷）ではあったが、妹の和宮を將軍徳川家茂へ嫁がせるなど、幕府と協調しようとするのが基本的であり、朝廷の名を借りて幕府をおとしめようとする動きを不快に思っていた。その意を汲んだ公家の中川宮や薩摩藩と協力して、会津藩は京都から長州勢を追放することに成功（八・一八の政変）した。これに感激した孝明天皇は、深夜に密かに容保を招いて感謝を記した^(※1)宸翰と、褒美の^(※2)御製を授けた。

西郷頼母が教育係となって、会津藩主としての心構えなどをしっかり教えた。そして彼が18歳の時、容敬が病により没し、家督を継いで9代藩主となった（1852）。当時の状況はというと、欧米諸国の船が日本近海に出没して開国を要求するようになり、国内でも幕府の求心力が低下して海防を担う藩も限られ、会津藩が江戸湾警備に赴いていた。

1854年に幕府は開国することを決定し、反対する一派と、さらには將軍後継問題も絡んで幕閣の中枢での対立を招いた。彦根藩主の井伊直弼が大老に就任して主導権を握り反対派への弾圧（安政



宸翰（写本）（会津若松市所蔵）



禁門の変図屏風（会津若松市所蔵）

将軍後見職である一橋慶喜と、新たに京都所司代に就任した実弟の松平定敬（桑名藩主）を中心にした新しい体制は、1864年7月に京都へ武力で押し寄せた長州藩を退け（禁門の変）、天皇からの信頼もより大きくなっていった。しかし、長州藩へ武力討伐を行なおうとした時に将軍家茂が死去。さらに半年後には孝明天皇も薨去され、再び倒幕運動が活発になったのである。このころ容保に子がなかったため、養子の話が持ち上がった。当初、将軍徳川慶喜の実弟の徳川昭武が有力だったが、昭武が御三卿の清水家を継ぐことになったため、その弟の喜徳が会津松平家に入った。

そして、もはや時勢の流れに逆らうこともできず、15代将軍徳川慶喜は大政奉還を表明して、徳川幕府260年余の歴史に幕が下ろされた。しかしその後を、徳川家を含めた合議制とするか、あくまでも徳川家の力を削ごうとするかの対立の溝は埋まらず、ついに戊辰戦争へと突入したのだった。鳥羽伏見の戦いの後、江戸で容保は隠居することとなり、藩主の座を喜徳に譲った。しかし会津へ帰ってからは、会津藩士だけでなく、他の旧幕府側の人々も集結し、容保はその総大将的な位置づけとなったのである。

（※1）宸翰：天皇直筆の文書

（※2）御製：天皇の作った詩歌や和歌

◆敗戦、そして…

徹底抗戦もむなしく会津藩は敗れ、容保は喜徳や義姉の照姫とともに謹慎することになり江戸に送られた。このとき身の回りの品のみ持ち出すことが許され江戸へ運んだ。とりあえず容保は鳥取藩邸で幽閉されることとなったが、翌年、会津藩の戦争責任を負う形で家老萱野権兵衛が一人だけ切腹することが決まり、容保は権兵衛に手紙で思いを伝えた。その後会津松平家は、容保の実子である容大を11代目として再興することが認められ、新たに斗南（現在の青森県東部）に3万石の領地を与えられた。容保自身も明治5年には預かり処分を免じられ、同9年にはあらためて従五位を与えられた。そのころ容保は、一時期御薬園を住まいとしていたが、ふたたび東京へ移ると、日光東照宮の宮司などを務め、明治26年（1893）に59歳で没した。

その後の松平家は、10代喜徳は謹慎が解かれると守山藩主として迎えられ、1891年に没した。11代容大は、幼くして斗南藩主となり、そのまま廃藩置県により知事となった。のちに子爵となり、以後松平家は華族として列せられるようになる。

昭和3年（1928）に容保の孫にあたる節子様か秩父宮家へ輿入れすることが決まり、会津が朝廷に弓を引いた逆賊だという汚名をようやく雪ぐことができる日が来たと、会津の人々は大いに喜んだ。